

No.3, August 2012

Research Center for Cooperative Civil Societies,
Rikkyo University

CONTENTS

- ▶埼玉大学共生社会教育研究センターからの資料移管を完了しました
- ▶共生社会研究センターに仲間が増えました—リサーチ・アシスタントの皆さん
- ▶「原発訴訟のトップランナーとして—伊方反原発訴訟弁護団長・藤田一良さんが語る」—参加記
- ▶自己紹介

- ▶センター主催 公開講演会のお知らせ
- ▶利用案内／問い合わせ先／アクセス
- ▶2012年度 センター組織
- ▶編集後記

埼玉大学共生社会教育研究センターからの資料移管を完了しました

立教大学共生社会研究センター開設からほぼ2年が経過した2012年3月17日。この日、長い間埼玉大学共生社会教育研究センターで大切に保存され、多くの人に利用されてきた市民・住民運動の一次資料が箱詰めされ、運び出されました。4トントラック7台分、段ボールにして約1,600箱分の資料は、翌18日に立教大学へ搬入されました。これで2009年3月に埼玉大学と立教大学との間で交わされた覚書に基づく資料の移管がすべて終了したことになります。

資料には、それをつくった人だけでなく、整理に関わった人たち、利用した人たちすべての思い出が刻まれています。たくさんの時間を資料と過ごしてきた埼玉大学共生社会教育研究センターのみなさんから私たちへ、そして次の世代、そしてまた次の世代へ引き継

いでいく息の長いリレー。渡されたバトンを手に、センターもスタートを切りました。

2012年7月現在、「宇井純公害問題資料コレクション」、「ペ平連資料」、「練馬母親連絡会資料」、「横浜新貨物線反対運動資料」の4つの資料群を公開しています。これらの資料群の詳細については下記をご覧ください。また、この5月からセンターに仲間入りした4名のリサーチ・アシスタント（いずれも立教大学大学院生、次ページをご覧ください）の皆さん、資料を分析しつつ、より使いやすい検索手段をつくる作業に取り組んでいます。作業の成果は共生社会研究センター Dspace <<http://dspace.rcccs.rikkyo.ac.jp/>> で順次公開していく予定です。

上記の4資料群以外、例えば「鶴見良行文庫」、「消費者関係資料」、「伊達火力発電所反対運動資料」などの資料群については、箱のまま仮のスペースに保管しており、現時点でのご利用はできません。今後、配架スペースが準備でき次第開封し、未整理分については目録を作成するなど、公開のための準備を進めていくことになりますのでご了承ください。

＜公開中の資料群の紹介＞

■ 宇井純公害問題資料コレクション

2003年、宇井純さんが沖縄大学を退官される際に寄贈された資料です。新聞・雑誌記事のスクラップブック167冊、件名ファイル約960点、ミニコミ・機関誌等（国内・海外）1,219タイトル、自主講座関連資料（『自主講座』『公害原論』『土の声・民の声』などの継続刊行物を含む）836点等が利用可能です。そのほか、埼玉大学共生社会教育研究センターで作成した、宇井さんの書かれた論文・記事のコレクション（1964年～2006年）508点は、宇井さんの幅広い業績を知るうえでたいへん便利な情報資源となっています。これらの資料は館内PCからキーワード等で検索可能（ウェブ検索は準備中）。また宇井さんが2006年に亡くなられて以降ご遺族より寄贈された分については、2013年より整理を開始する予定です。

■ ペ平連資料

「ペトナムに平和を！市民連合」元事務局長の吉川勇一さんから1999年に寄贈を受けた資料です。新聞・雑誌記事のスクラップ約110冊、ペ平連が発行したさまざまな文書のスクラップブック23冊、受信文書、会議資料、集会・デモ届出・申請書、集会資料、裁判資料、書簡（一部非公開）、各地のペ平連から送られてきた機関誌やチラシ、吉川さんの分類による各種の件名ファイルなど、資料の形態も内容もじつに多彩です。現時点では、紙媒体の資料でプライバシー等の問題がないものは原則として公開しており、目録は（簡易なものですが）館内でご確認いただけます。このほかに音声資料、写真、ポスターなど、追加寄贈を受けた資料がありますが、こちらは2013年度以降、整理に着手する予定です。

■ 横浜新貨物線反対運動資料

横浜新貨物線反対同盟事務局長であった宮崎省吾さんから、まず1993年に住民図書館へ寄託され、その後1997年に埼玉大学へ移管されました。新聞記事スクラップ、反対同盟機関誌、ビラ、行政とのやりとり、裁判資料など約3,000点からなるこの資料群は、全資料が横浜市史資料室で目録化・マイクロ化されていますので、現物は当センターで、マイクロは横浜市史資料室でご利用いただくことが可能です。また、2008年には『横浜新貨物線反対運動資料（戦後日本住民運動資料集成 3）』（埼玉大学共生社会研究センター監修）がすいれん舎から刊行され、各地の大学図書館等にも所蔵されていることから、センター所蔵資料のなかでも最も広く利用されている資料群のひとつと言えるでしょう。



横浜新貨物線反対運動資料

■ 練馬母親連絡会資料

同会事務局を長年担当された林光さんが亡くなられてから、同会のお仲間を通して寄贈されました。機関誌『豆ニュース』（1972年～2000年）、活動に関する資料を年度ごとにまとめた「練馬母親」ファイル群（1971年～1999年）を中心に、1957年の発足から2001年までの活動の記録がそろっています。子どもと文化、学校教育、社会教育、憲法、戦争、平和、福祉、医療、環境、選挙、地域開発。多彩なテーマがこの資料群の特徴で、仕事に子育てに忙しの女性たちが、日々の暮らしの中で出会う問題に積極的に取り組み、住民自治を実践していくようすが資料から浮かび上がります。第一次整理作業が終わった段階での仮目録があり、かんたんな検索が可能です。

共生社会研究センターに仲間が増えました

2012年5月から、立教大学の大学院生4名がリサーチ・アシスタント（RA）として、宇井純公害問題資料コレクション・ペ平連資料の整理に携わっています。全員が史学を専攻する博士前期課程の学生で、資料を取り組む姿勢はまさに真剣そのもの。「こんなすごい資料があった！」「これはいつたいどこの言葉？」「表紙に書いてあるこの番号は何の意味だろう？」など、資料を整理するなかで次々に生じる疑問を活発に議論し、解決しながら作業を進めています。今回は紹介もかねて、船津かおりさんにはセンターが2012年2月に主催した公開講演会の参加記を、小山莊太郎さん、佐々木真依子さん、高橋賢吾さんにはかんたんな自己紹介を執筆していただきました。

立教大学共生社会研究センター主催講演会

「原発訴訟のトップランナーとして—伊方反原発訴訟弁護団長・藤田一良さんが語る—」参加記

船津 かおり（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程1年）



はじめに

私が2月27日の藤田一良さんの講演会の存在を知ったのは、私の研究に関わるとして、指導教授が講演会の存在を知らせてくれたことからであった。しかし、不勉強にして、私は「伊方原発訴訟」とは何か、「藤田一良さん」とはどのような方なのかということを知らないかった。私は、社会運動が退潮期を迎えたのちもその活動を続けていた団体・人々の運動の論理に関心をもち、「救援連絡センター」を研究テーマとしている。この組織は学園闘争が活発だった時期に発足したため、私はこれまで学生運動から派生する運動に重きをおいて研究をすすめていた。社会運動を学ぶうえでは、反原発訴訟や住民運動を避けては通れないことは十分承知していたが、後回しにしていた面もあった。もちろん学生運動の中でも、逮捕され裁判にいたるケースはとても多い。裁判とは一体どういうものなのかをしっかりとつかんでいないことだけでも、私の運動の理解は表面的なものに終っていると感じていた。裁判は運動とはどう違うものなのかという疑問ももつた。そのような関心から参加を決めたが、アルバイトが忙しいことを理由に予習はせずに参加した。

藤田さんは、ご自身の弁護士としての活動を、伊方原発訴訟との関わりを中心に語ってくださった。その内容は私にとって、貴重で刺激的なものだった。講演会の表題が語るように、伊方原発の訴訟は、日本全国の原発訴訟の先駆である。その弁護団長であった藤田さんのお話は、1970年代以降の住民運動・反原発運動を研究するうえで貴重であることは間違いない。今回の講演は、長年原発訴訟に関わってこられた藤田さんだからこそ語れるものであるとともに、藤田さんのお人柄が深く感じられるものもあった。この参加記では、私の印象に残った3つの点を中心まとめてみたいと思う。

1 反原発訴訟の弁護活動

弁護士のスタートが人より遅かったという藤田さんだが、冤罪事件をはじめさまざまな事件を扱っている。いろいろな事件でエネルギーを消耗したが原発訴訟はなかでも群を抜いて大変な裁判だったと語った。家族を抱える身でありながら収入は少なく、そのことが「だんだんとボディブローのようにパンチが効いて」、「一日、一年とだんだんと月日がたっていくことだけが頼りだった」が、「原発裁判はそらぬ顔でやりすごした」という。もっとも、「あんたは家族だが家の賊だ」と妻にいわれたということを笑いながら話す藤田さんの様子は、決して暗いだけの時期を思い出しているのではないかと感じられた。それは、なぜだろうか。

反原発の行政訴訟という前例がない裁判をすすめるにあたっては、何もかも一から自分たちで考えていかなければならなかった。その試行錯誤のなかで藤田さんたち年長の弁護士は、若手弁護士の考えに沿い、あえてそれに対して口出しこそはしなかったという。若手弁護士たちの訴訟への関わり方は、「学生の頃、全共闘などに参加していたのだろう」と思われるものだったようで、藤田さんは、そこに「時代の要請」を感じたとも語った。若手が裁判の過程でどんどん育っていくことがうれしく、彼らが一生懸命考えて裁判に関わる姿を見て、弁護士になってよかつたと感じたという。

その後最高裁に上告すると、今までの判決はもう変わりようがないとして若手の弁護士たちは訴訟から去っていった。そこで荻野晃也さ

んと藤田さんが二人で作成した書面を、藤田さんは「誰にも遠慮せず、いいといことを思い通りに書いた」という。そこでは、大勢話し合いながら裁判に取り組んだり、若手弁護士の成長を感じたりするなかで生まれるやりがいとは違った、「仕事の快楽」を感じたという。

後者は一見、自己完結的な達成感から感じる仕事のやりがいとも思える。しかし私は、それらはともに、他者との信頼関係から生まれるコミュニケーションのなかでつくりあげられたものだと感じた。

藤田さんは原発訴訟において、弁護士を辞めようと思ったこともあつたと語った。それは、二審の際、裁判官が急に結審を宣言し、そのまま法廷からいなくなってしまうという事件があつたからだという。弁護士も裁判官も、ともに司法の世界で闘うものとして、その世界のなかで通じるシンパシーというものがあるのではないかと信じていた気もちが、伊方の原発訴訟で壊されたことのダメージは大きかったと藤田さんは語った。

それでも、藤田さんを原発訴訟や弁護士に留ませたものはなんだったのか。共生社会研究センターのセンター長の話では、藤田さんはご自身の弁護士活動について、「他の方のしないことをやってきただけだ」と語ったそうだ。講演のなかでも、反原発訴訟に関わった弁護士や科学者たちとの交流が多く語られていた。そうした過程で築かれた信頼関係や、仕事への責任感などが、藤田さんにそうさせたのではないかと、私は感じた。

2 党派対立のなかでの弁護

前述のとおり、私は1960年代後半以降の社会運動に関心をもつている。研究対象とする救援連絡センターは、羽田・三里塚・東大闘争などの個々の闘争を救援するために存在する各救援会が、国家権力によるさまざまな圧力に対し、より強力で組織だった救援活動を行うべく発足されたものだ。藤田さんのお話のなかで私が驚いたのは、思いがけず、救援連絡センターの活動に深く関わっていた水戸巖の名前が出てきたことであった。

行政訴訟に入る前、民事の土地裁判に藤田さんが携わっていたときに、共産党との関係がつよい弁護士との関係が悪化する事件があった。おそらく理由の一つとして、いわゆる「新左翼」運動に従事する学生の弁護経験が、藤田さんにはあつたことが考えられる。藤田さんからすれば、「新左翼」であろうとなかろうと、中核派もしくは革マル派であろうとなかろうと、困っている人がいればそれを助けるという姿勢を貫いたまでだった。しかし、藤田さんに対して対立姿勢を打ち出した共産党系の弁護士は、藤田さんを「トロツキスト弁護士」であると批判し、民事の土地裁判から放りだしたという。藤田さんが、物理学者で市民運動家でもある水戸を弁護団に加えようとしたことも、土地裁判から分離する原因の一つであったという。共産党系の弁護士は、水戸が「浅間山荘事件」の被告たちとの接見を警察に要請していたことを理由に、弁護団に加えることをよしとしなかったのだ。反原発訴訟を続けていく糸口をなんとしてでも探りだそうとして、土地裁判に臨んでいた藤田さんたちとは対照的に、党派主義をもちづけていた弁護士もいたということは、大変興味深いエピソードであった。

水戸は剣岳の登山中に行方不明となりそのまま帰らぬ人となつたのだが、そのことを本当に悲しく思ったことや、水戸が「心根のよい、いい人だった」ことを、藤田さんは話してくれた。藤田さんが水戸のことを「水戸巖（がん）ちゃん」と愛称で呼んでいたことも印象に残つた。それは私にとって、二人が弁護士として互いに認め

合い、同じく市民運動に携わるものとして、こころの交流もあったのだろうと推察されるひとコマであったからだ。

3 反原発運動における訴訟の重要性

藤田さんは講演の最後に、福島の原発事故後にとくに聞かれるようになった「脱原発」という言葉に対して、「伊方の人の立場を考えると、もう少し別の言い方をしてほしい」、「運動をすごく頑張っている人と敵対するわけではないが、どうやって原発をやめさせるかを具体的に突きつめて考えてほしい」と語った。原発訴訟を継続し、勝訴を勝ち取ることがどれだけ難しいことなのかを、私は今回の講演で知った。そして、弁護士として20年以上原発訴訟に向き合いつづけた藤田さんだからこそ、裁判の重要性をはつきりといいきれるのだと、私は思う。また、原発の電力を使う生活をつづける自分が、「脱原発」を唱えることの矛盾を捉えることこそが、原発にまつわるさまざまな問題を自分の身に引きつけて考えていく第一歩なのとも思った。

「原発は憲法違反だという解釈が成立つと思う」という質問者の方の意見があった。それに対して藤田さんは、「裁判を闘うなかでは色々なことを全部取り入れなければ勝つことはできず、それさえ

言っておけばOKというようなものはない、現実的な法の制約のなかで闘っていくことを考えたとき、法体系全部を見るべきだ」と語った。これも、実際に裁判を闘った経験があるからこそいえる言葉ではないだろうか。

おわりに

最高裁に上告する際、今までともに闘ってきた若手の弁護士たちは、勝ち目がないとし訴訟から離れていたとき、「僕は勝ち目がないとは思わなかつたし、原発が今もあって動きつづけているのだったら、関わらずにはいられないし、最後までねばつて主張をきちっとしていかなければいけないと思った」と藤田さんは語った。この言葉から、原発が存在する地に住みつづける住民の不安や憤りに、まるごと寄り添おうとする覚悟を感じた。原発の恩恵にふくしながらも、原発のない地域でほんやりと生きてきた私が、今すべきことは、当時の人々の生活の営みのなかに根づく運動を歴史として捉えていくことなのではないだろうか。講演会当日も一部が展示されていたが、立教大学共生社会研究センターには、伊方原発訴訟に関する資料が所蔵されているという。それらを出発点とし、これからいっそう学んでいきたいと思う。

自己紹介

抽出といった本来の目的をふと忘れて、整理の対象であるミニコミや書類、新聞記事を読みふけってしまったこともあります。資料を利用する方々のお役に立つためのデータを作成するという発想とそのために必要な知識・技術をこれから身につけていきたいところです。

何時もセンターには他の建物を通じてスタッフ用の通用口から移動していたので、実は最近になって初めてその外観の全容を知りました。通りの方から眺めるとセンターは3階建ての住宅にしか見えず、内部の資料や書庫の存在を知っているだけに、外観と内部の違いには何だかまるで映画に出てくる秘密機関を見ているような感があり、奇妙な気分になったのを覚えています。勿論センターはどなたにでも公開されていて、住民運動・市民運動の資料や現在も収集されている様々なミニコミなどを読むことが出来ます。戦後史や現代社会に関心を持つ方々にとって面白い場所だと思いますので、後に資料を利用する人々に少しでもお役に立てる資料整理が出来ればと思っています。

蔵のなかに入って、目的の史料へと冒険をしなければならないのが、今の日本の現状です。万一整理されても、保管がしっかりとおらず、虫の一大繁殖地と化していたりして、閲覧に堪えうる状態にないという状況にも、よく出会います。そういう場合には一から史料と向き合って、整理していかなければならないので、アーカイブスの原理を学べることは非常に貴重な機会です。

また、私は社会教育主事の資格取得のための勉強もしており、将来も社会教育に携わっていく予定です。宇井先生の原資料を扱うなかで、市民運動の歴史を肌で感じており、経済成長の影で犠牲となってしまった人びとや、それに屈せず闘ってきた人びとの軌跡を追うことはとても良い勉強になっています。いつか、このセンターの資料を生かした社会教育事業を行う…という野望を秘めつつ、仕事をしています。

に気付かかれてきます。特に、個人や各種団体が作製したミニコミや公害関係の資料が私にとって興味深い資料です。ミニコミは人々が生活の中で何を考えながら生きていて、何を主張しようとしたのかなど時代性が垣間見える資料です。さらに、歴史の表舞台には出てこない人々の心や声を現在に伝えてくれる貴重な資料のため、整理しながらつい読み込んでしまいそうになります。また、公害関係資料でも宇井氏が集めた世界各国の様々な公害の状況を知ることができる他に、被害にあつた方々への視点もあります。全く知らない分野への知見が広まるとともに、資料整理をやっている段階でも興味がわいてくるものばかりです。RAの仕事を通して、出会った資料から自らの知見を広げるとともに、歴史研究を行う際に資料から読み取れる人々の心や声に耳を傾けて読み取っていくことの大切さを学んでいきたいと思います。

小山 莊太郎(立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程1年)



この春からRAとして、主にペ平連関連の資料整理に参加している大学院生の小山です。大学院での専攻は歴史学・日本近現代史で、主に1910～30年代の都市史・政治史に関心を持って学んでいます（卒業論文では1920年代の横浜市政について取り上げました）。1960年代或いはそれ以降の市民運動については、これまで資料に接する機会が少なかったこともあり、徐々にではありますが整理業務を通じて学んでいる状況です。

もともと書店や古本屋、図書館に通って本棚を見て廻ったり、新聞記事の切り抜きをしたりといつたように資料を探したり集めたりすることが好きでした（そのため書籍や新聞記事をつい溜め込んでしまい、自室は常に未整理状態なので、迷惑をかけてしまっている家族には整理を要求されている昨今です）。これまででは主に史資料を「利用」する側だったこともあり、ついデータの入力や情報の選択・

佐々木 真依子(立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程2年)



大学院においては、日本の戦時期農村について調べており、特に馬が戦時中にどのような役割を果たしたのか、研究しています。なので、ゼミでは「馬の人」と呼ばれています。

RAでは現在、宇井純先生の資料整理をお手伝いしています。広範囲の環境問題、市民運動に関する原資料を扱うことで、良い刺激を受ける毎日です。一見、私の専門とかけ離れているようですが、アーカイブスの基礎を学べるという点でも非常に有意義な作業です。

農村史を研究していると、どうしても整理されていない史料群に出会います。県レベルならまだしも、町村レベルになると、自ら土

高橋 賢吾(立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程2年)



私は、一人の外務官僚を軸として外務省内の権力関係、大使として赴いた先から観た十五年戦争や欧州大戦の分析、一外務官僚の外交論についての研究を行っています。民衆からの視点ではなく政治や外交など大きな広がりの中での研究ですが、一人の官僚というミクロの視点、人々の生活や世論も関連するような研究を行っています。

私は、今年の4月からRAとして資料の整理や分析を行っており、このような仕事を行なうことは初めての経験です。現在は宇井純氏の資料の整理を行うとともに、内容の分析を進めている段階です。自身の研究分野とは異なる時代や分野の資料を見ていますが、資料に目を通せば通すほど資料の面白さ、研究にも関連するような視点

立教大学共生社会研究センター公開講演会 「問いつづけた原子力—雑誌『技術と人間』が残したもの」

人間と科学技術の関係を問い合わせ続けた雑誌『技術と人間』。センターでは、発行元である株式会社「技術と人間」よりバツクナンバー全号の寄贈を受け、大切に保存しています。福島原発事故からほぼ1年後のこの春、同誌掲載の原子力関連論文36本が1冊の本にまとめました。『『技術と人間』論文選—問いつづけた原子力1972-2005』(大月書店、2012年4月)です。早くから原子力開発を批判し、原発の危険性を訴え続けた論者たち。にもかかわらず、維持された「原発体制」。放射能汚染の現実を前にして、私たちはこうした歴史から何を学び、考え、これからどのような社会を構想していくべきでしょうか。

センターではこのたび、大月書店のご協力を得て、同書の編者である天笠啓祐氏と西尾漠氏をお招きし、公開講演会を開催することになりました。どうぞふるってご参加ください。

日時：2012年9月15日(土) 14:00～17:00(開場13:30)

会場：立教大学池袋キャンパス 14号館3階 D301教室

共催：株式会社大月書店

講師・テーマ：

・天笠啓祐氏(ジャーナリスト、市民バイオテクノロジー情報室代表)
「問いつづけた原子力—雑誌『技術と人間』が残したもの」

・西尾漠氏(『はんげんばつ新聞』編集長、原子力資料情報室共同代表)
「私たちは何を学ばなかつたのか—日本の原子力開発史を振り返る」

問い合わせ先：立教大学共生社会研究センター
(右記連絡先をご参照ください)

センター利用案内

利用資格

とくにありません。立教大学共生社会研究センター所蔵資料の利用を希望される方は、どなたでもご利用いただけます。

開館時間

★ご利用には事前予約が必要です。

月～金曜日(祝日のぞく) 10:00-12:00, 13:00-16:00

ただし、立教大学の一斉休業日のほか、資料整理などのため臨時に閉館する場合もあります。その場合はあらかじめセンターホームページなどでお知らせいたします。

閲覧

初回に簡単な利用者登録をお願いいたします。

資料は原則として閉架式です。ホームページ上で公開しているデータベース検索により、あるいはスタッフと相談のうえ閲覧を希望する資料を特定し、閲覧申請書に記載して提出してください。

閲覧に際しては、スタッフの指示に従ってください。

資料の貸し出しさは原則として行いません。

閲覧制限等

資料は原則公開ですが、プライバシー侵害の有無や資料保存の観点などから閲覧を制限する場合があります。詳しくは下記までお問い合わせください。

【2012年度 センター組織】

センター長 高木 恒一(立教大学社会学部教授)

運営委員会 高木 恒一(センター長、立教大学社会学部教授)

藤林 泰(副センター長、埼玉大学教授・共生社会教育研究センター長)

沼尻 晃伸(副センター長、立教大学文学部教授)

老川 慶喜(運営委員、立教大学経済学部教授)

市橋 秀夫(運営委員、埼玉大学教養学部教授)

町村 敬志(運営委員、一橋大学大学院社会学研究科教授)

スタッフ 学術調査員：平野 泉

事務局：浅利 祐子

【お問い合わせ・ご予約は】

立教大学共生社会研究センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1(ミッセル館西棟)

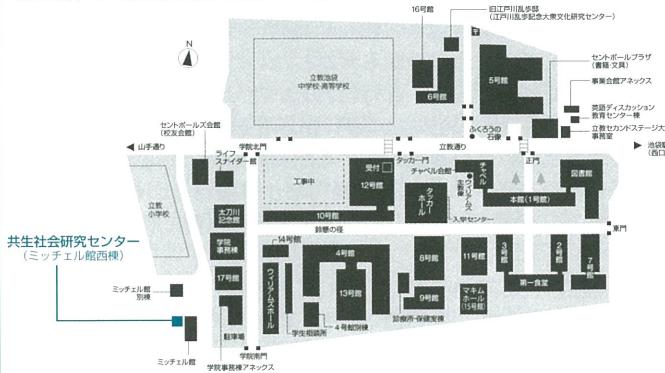
電話：03-3985-4457 FAX：03-3985-4458

E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp

【センターへのアクセス】

JR・私鉄・地下鉄各線

「池袋」駅・地下鉄「要町」駅から徒歩約10分



編集後記

『PRISM』第3号は、埼玉大学からの資料移管終了を記念して、少々趣向を変えた構成にしてみました。所蔵資料の量が単純計算でも倍に増えたため、資料整理の作業も本格化しています。その主戦力としてRAの皆さんのが来てくださるようになり、静かだったセンターはすいぶんと活気に満ちた空間となりました。勤務開始後の数週間、宇井純さんの資料を配架した書庫(通称「宇井さん部屋」)にこもってデータと資料を照合する面倒な作業に地道に取り組んでくれたRAのお二人。作業を通して宇井さんと通じ合うものがあつたらしく、書庫に入るときはいつも「ここにちは～」とごあいさつしています。(平野)



PRISM — A Newsletter of Research Center for Cooperative Civil Societies — No.3, August 2012

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, Japan 171-8501

Tel: +81-3-3985-4457 Fax: +81-3-3985-4458

E-mail: kyousei@rikkyo.ac.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RCCCS/>



立教大学
RIKKYO UNIVERSITY